
ブラックコーヒー

真殊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラックコーヒー

【Nコード】

N1976S

【作者名】

真殊

【あらすじ】

初雪が降っている町。彼を待っている彼女のお話。

……来ない。

初雪が降る中で、私は制服のまま待っていた。

人が行き交う公園で、1人ぼつりと。

みんな寒そうに私の前を通り過ぎて行く。私は公園のベンチに座っていた。

池を囲む様にして出来た公園だけに、風が冷たい。私の目の前に、薄く氷を張った池がある。

携帯を確認しても、着信やメールはない。というより、もう6時だ。

「騙されたのかな」

そんな不安さえ頭をよぎる。

彼は人を騙す様な人じゃない。それは私が一番よくわかってるのに、それでも、辛い。

手袋を忘れたからって、そそくさと学校に取りに戻ってしまった彼。

私はかれこれ1時間待っていた。

「帰ろっかな」

なんて言ってみると、息が白く消えて行く。

それを見ると帰る気すら失せてしまった。

――元々、私たちは恋人なんかじゃない。

彼が彼女と別れきれないから、私が恋人のフリをしてるだけだ。私と彼は小学校からの幼馴染で、まあ頼みやすかったんだろう。

あんなにモテていた彼がこんな私と付き合い出したから……少な
くとも周りは付き合ってると思ってる。

彼にくつついて離れなかった元彼女も、「そんな人だったんだ」
って離れて行ったのが昨日。

私は用済みかな？

まあ要らないよね。元彼女も離れた訳だし。

そこまで悲しくないし嬉しくもない。だって彼のこと好きじゃな
いし。

かつこ良いしスポーツ万能だし頭良いし完璧な彼なんて好きにな
れなかった。

と、私が回想にふけていると。

「悪い悪い！待った？」

と言って彼が走って来た。制服の上に黒いコートを来て、茶色に
染めた癖っ毛が可愛い。

私より頭一つ分身長が高い彼でも、実は私より1つ年下だ。私は
今年、高校を卒業する。

受験勉強で忙しいのに……。

「うん、待ったよ」

彼の手には缶コーヒーが2つ。

「はい。もう冷めちまってるけど、お前はカフェオレだよな？」

彼は私に、缶コーヒーの内の1つを渡して来た。

「ううん。私ブラック」

「マジ？お前コーヒー飲めるの？」

本当にびっくりしているらしい彼に、私はにこりと笑ってみせた。
「今日は苦いのが飲みたい気分なの」

冷めちまってるから、と言って渡されたブラックの缶コーヒーは
少し温かった。

公園のベンチに並んで座って、2人でただコーヒーを飲む。

苦いしブラックコーヒーは苦手だ。

だけど、今日は苦いのが飲みたかった。

元彼女の顔を思い出しちゃって、つい笑っちゃった自分がいたか
ら。

……高校生だもん。彼とか彼女とか、恋人とか早いよ。

明日から、また彼と私は幼馴染に戻る。

いつの間にか、初雪がやんでいた。

（後書き）

短いです。

元々携帯のホームページに載せていたものですので、そのまま改訂もせずに投稿しました。

読みにくい所はご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1976s/>

ブラックコーヒー

2011年10月8日23時38分発行